

山林を「ふるさと」に再生

環境保全と児童福祉を実現する

荒れた山林は現代のフロンティア

都心から車で1時間ほどの八王子市美山町の山林に、子どもたちの歓声が響き渡るようになりました。東京里山開拓団が児童養護施設の子どもたちと共に毎月通うようになって8年になります。ここは実は何十年も藪や雑木がうつそうと茂り、地主も地元の人も入らなかつた場所なのです。

午前中は道や広場の開拓、各種設備の制作、四季折々のイベント等、大人も子どもと一緒に山林の開拓と活用を試行錯誤しながら進めます。昨秋に直撃した台風のせいで制作中のツリーハウスは壊れ、またやり直します。でも、倒された大木は新たな工作材料となり、たくさんの雨は雨水タンクを満タンにします。

お昼は枯木を拾い集めて焚火を起こします。かまども皆で石を運び、現地の粘土を雨水でこねて作ったものです。メニューはホイル焼きや鍋などのシンプルな焚火料理が中心です。都会で鈍った体を動

NPO法人東京里山開拓団代表 堀崎 茂

かし五感を研ぎ澄ますと、食材そのものの味と温かさが体に染みわたります。

午後は自由時間です。広場で大人を誘って鬼ごっこや縄跳びをしたり、伐った木で工作したり、根っこや石掘りの続きをしたり、ハンモックに横たわったり、ツリーハウスの上でおしゃべりしたり。この時間は子どもたちといろんな話をする大切な機会です。

こうして荒れた山林に通うことで里山は再生保全されていきます。そして、私たちはここに「ふるさと」を自ら作り上げようとしています。もちろん移住するわけではありませんが、本物の心のよりどころを築こうとしているのです。

荒れて放置された山林は今、経済的価値がなく時に登記もされず、花粉症、土砂崩れ、獣害などの社会問題を引き起こす厄介者とされていきます。ところが、そんな山林が現代都市社会の抱える課題克服に貢献する場所に生まれ変わる——そんな夢のようなことが今ここで実現しているのです。

児童養護施設との里山開拓は好評のうちに60回継続し、虐待や貧困など様々な理由で親から離れて暮らす子どもへの参加は延べ350人を超えました。荒れた山林は、世界最大の都市圏・東京にも残された現代のフロンティアなのです。

心を解放してくれる里山のチカラ

大げさに聞こえるかもしれませんが、虐待事件のニュース

スになった子が「ここはうちみたいなところかな」「自由な世界！」と満面の笑顔で話す場面を想像してみてください……。実は、一緒に通う児童養護施設の小学生に「里山ってどんなところ？」と尋ねて返してくれた言葉なのです。ここでは、専門知識も経験もつながりもない大人がわずかな時間を一緒に過ごすだけで子どもの方から自ら心を開いてくれるのです(通常は



綱引きに興じる子どもたち

心理の専門家でも長い時間がかかるものですが!)。救世軍社会事業団が運営する児童養護施設・機恵子寮の高田祐介施設長はこう言われます。「子どもたちの心にほっかりと空いた空間をいろんな経験で埋める必要があります。かつて子どもたちが施設に来た時の様子や背景を知っている私たちからすると、こんなふうにはまる姿は胸にこみあげてくるものがあります」

進める他に例のない取り組みとして、厚労省からは子ども家庭局長賞、林野庁からは助成金をいただきました。一石二鳥にこだわるのはそここそ行政や専門家、事業者が縦割りのなかでやらなかつた課題克服の鍵があると考えられています。

さらに昨年、企業向け里山研修事業も開始しました。CSK(株)社員向けに実施したのは、社会貢献、チームワーク、メンタルケアを里山で実践しながら学ぶ1日研修です。この事業の目的は、助成金や寄付に頼らないNPO運営モデルづくりと、児童養護施設退所者雇用による自立支援実現にあります。また、全国の里山を地図表示するウェブサイト「日本ノ里山ヲ鳥瞰スル」も公開しました。約1千件と全国随一の件数を誇る本サイトを運営するのは何と一人の女子高校生です。

そう、これこそが人の心を開く里山のチカラです。想像もつかないくらい大変な状況にあった子どもたちの心さえ軽々と開いてしまうのです。子どもたちの乾き果てた心の大地も、生命力や包容力にあふれる里山で誰にも強制されない自由な時間を仲間と過ごすうちに、生きんとするチカラが泉となつて湧き上がってくるのです。

環境保全と児童福祉の一石二鳥

私たちの活動は「環境保全」と「児童福祉」を一石二鳥で

これから私たちは全国の荒れた山林を現代都市社会の課題克服に貢献する頼もしい存在に変える試みを賛同者と進めたいと思います。